「小テスト」を利用したリーディング授業の実践報告

若　狭　智　子*

A Report on the Effectiveness of Tests in English Reading Classes

Tomoko Wakasa*

はじめに

2005年度、大阪電気通信大学において担当したリーディングのクラスで、ほぼ毎時間、「小テスト」を実施した。この「小テスト」の出題範囲は、その当日の授業中に学習した項目内とし、毎授業の最後に行うよう設定した。この目的は、学生の授業中の学習意欲を高め、緊張感を維持することと、学生の授業内容の理解を深めさせることであった。そして、大学で教壇に立つこと自体が初めてである私にとって、この「小テスト」の結果は、学生の理解の程度を知り、自らの指導方法などの適切さを測るための、教師側のフィードバックとして、重要な役割を果たしていた。言い方を変えると、「小テスト」には、授業ごとに、学生ひとりひとりの反応が現れることになり、ある意味それは、学生と対話をするためのツールであったとも言える。そこで、この「小テスト」を利用した英語授業の実践を報告していく。

１．「小テスト」の意味

１．１．　評価・測定の種類

学習者の学力または認知度を、評価、測定するための、いわゆる「テスト」の方法は、その実施時期や、形式、目的などで、さまざまな種類や呼び方がある[1)]。例えば、言語測定の全分野にわたって測定される場合には、「試験」(Examination)、特定の分野について測定される場合には、「テスト」(Test) と規定される。また、短く簡潔な形式で、ふつうは予告なしに行われる場合には、「クイズ」(Quiz) と呼ばれる。ただし、この規定は厳密とは言いがたい。このような分類のすべてを含め、広義での評価や学力測定の方法を、ここでは「テスト」と呼ぶこととする。また、ここで取り上げる形式の「テスト」は、大抵は授業中に実施する短時間のものであり、上記の分類では「クイズ」の性格が強いと言える。だが、ここでは、短時間の「クイズ」だけでなく、授業時間全体をかけて行わせた課題のことなども指しており、「クイズ」の分類とは必ずしも一致し

＊ 大阪電気通信大学　非常勤講師

1) 評価方法の分類などについては、池永勝雅・小笠原八重『英語指導の基本』(桐原書店 1990) pp.195-97.を参照にした。

ないため、授業内に呼んでいた通り、「小テスト」と呼ぶことにする。

１．２．「テスト」の機能

さて、すべての「テスト」の実施には、学習指導を円滑にする機能がある。一般的に、「テスト」の機能については、次のようにまとめられている[2)]。

表１「テスト」の機能

① 教育機能	生徒による評価	学習の動機と方向づけ
		学習内容の習得度の自己評価
	教師による評価	学習者への評価（学力内容についての評価）
		教師自身への評価(教材や指導法などへの評価)
② 練習機能	テスト即学習としての練習機能	
③ 選定機能	入学選抜、組分けなどに関する相対的評価と選定	

上記の機能のうち、授業時間内に実施される「小テスト」の中心的機能として想定されるのは、教育機能と練習機能であろう。普段からの「小テスト」の実施は、学習者に学習へのモチベーションを与え、学習促進をはかり、習熟度を高める効果が期待できる。また、教師側にとっても、こまめに学習者の習得度を測定することで、自らの自己評価となり、指導法等の有効性を吟味して、より効果的な方法へと授業を改善していくためのヒントとなる。そして、「小テスト」を受けることそのものが、学習者にとって、学習内容を復習し理解を高める助けとなることは間違いがないだろう。今年度、実施した「小テスト」は、教育機能と同程度、「小テスト」の練習機能を意識していた。

１．３．「小テスト」の形式

「小テスト」の形式は、前回までの授業において学習した項目について、重要な単語や難解な文法などを取り出し、出題するという場合が多いだろう。だが、私は敢えて、授業の最後の時間を利用して、当日の授業内容について質問するという形式を採用した。確かに、出題範囲を当日の学習内容に限定すると、「小テスト」に向けて、授業外の時間に学習する必要がなくなるため、前項で述べたような教育的機能が十分に作用しにくいとは言える。その意味で、学習の方向性とモチベーションを与え、自主学習を促進するためには、「小テスト」は前回以前の学習項目から出題するという形式の方が、理に適っているかも知れない。だが、その日の授業の内容を「小テスト」することは、授業時間内の学習態度そのものの向上を目的とする場合、むしろ有効である。と言うのも、授業の終わりに残された「小テスト」の存在は、授業そのものに集中させ、内容を理解しようとするモチベーションを与える効果を期待できるからである。

２）測定・評価の機能については、片山嘉雄『新･英語科教育の研究』(大修館書店 1994) p.273. を参照にした。

また、この形式の「小テスト」は、授業との連続性を保っているため、それに解答するという作業そのものが、おのずと学習者にその日の授業を復習させる機能を持つ。例えば、必要な情報を英文の中から取り出すことを要求すれば、それがその日の英文をスキャニングし、その内容をまとめることとなる。また重要な文法項目の質問をすることで、その項目をきちんと理解しているかどうか、その時間内に学習者自身が自己評価することができる。実際、「小テスト」で出題した内容について、学生は時々、積極的に質問してくる。また、このような質問も含めて、「小テスト」の結果は、教師側のフィードバックの材料となる。学生の理解度を測定し、説明が不十分であった点を補足説明したり、指導方法や教材提示を改善したりと、その結果を即反映させていくことが可能となるのである。

このように、この形式の「小テスト」は、確かに授業内の学習意欲の促進に限られた、短期的なものにとどまるが、少なくとも授業時間内の学習態度の向上と、学習項目のより深い理解を促進する上で、有効であると言える。またそれが、結果的に授業外の自主的な学習を促進することになれば、と期待している。

１．４．「小テスト」の問題設定

それではこの「小テスト」には、どのような問題を設定すべきだろうか。問題形式そのものに関しては、単語問題、和訳問題、文法問題をはじめとして、真偽法 (True-False)、問答法 (Question-Answering)、書き取り法 (Dictation)、作文法 (Composition) など、必ずしも珍しい形式を考案する必要はないと考えるが、多様な形式の問題設定をする必要はある。と言うのも、まず、この「小テスト」は授業の流れの延長にあり、各授業の内容に応じた問題設定でなければならないためである。また、同じ形式の問題を連続して実施していると、マンネリズムに陥って、「小テスト」による意欲促進の効果は発揮できない。例えば、単語テストを繰り返すと、単語の意味さえ知っていればよいと学生に感じさせ、また和訳テストを繰り返すと、授業の内容は和訳さえ書き取っていればよいと感じさせてしまう、と言ったように、学習者の注意は「小テスト」に出題される内容にのみ払われることとなり、授業態度の向上をはかるという目的を十分に達成できない。したがって、効果的な「小テスト」を行うためには、常に多様な形式の問題を設定し、変化をつけることが大切である。それによって、授業全体への集中力を高めることとなるのである。

２．「小テスト」を利用した授業実践記録

それでは、次に実践記録を報告する。既に述べたように、「小テスト」は授業の流れの一部として実施しているため、それは授業内容と分けることはできない。したがって、この報告は、「小テスト」を含めた授業全体の実践記録となることを、先に述べておく。

２．１．質問と答えの英作文

長文の内容についての質問や正誤問題、多肢選択問題に答えさせることは、リーディングにおいての一般的な「テスト」方法である。これは、学習者自身が内容を正しく理解しているかどうかを自己診断できる、という意味で有効であるが、それだけではなく、教師側も彼らの理解の程

度を把握できる、という有効性がある。ただ、この方法の問題点は、提示される質問が、与えられたリーディング教材の中の情報のみに限定される傾向を持ち、学習者の興味がそれ以上拡がっていくことは期待できないこと、そして、質問文そのものもまた与えられた内容であり、学習者がそれらに答えるための作業を黙々とこなすことは、結果として受動的なリーディングであることには変わりがないことである。だが、数十人程度の学生に対して行う一斉授業の中では、学習者の能動性を尊重するのにも限りがあるだろう。そこで考えたのが、「小テスト」の利用であった。

(1) 正確な読解の指導

まず、授業中には、学習者にリーディング教材を読み、それに関する質問に答えるという作業を行う。この学習は、「与えられた教材」や「与えられた質問」に取り組むわけであるから、受動的な形態ではある。だが、この段階でまず重視していることは、正確に「読む」技術、そして正確な文法で「答える」という技術を高めることである。それゆえ、本文にせよ質問文にせよ、正しく読解できているかを確かめながら読んでいき、さらに、質問に対する答えは、単語で答えるのではなく、文章で答えることを指導する。

例えば‘When is this program broadcast?’という質問文に対して、‘9 p.m.’や‘Wednesday’など単語で答えるのではなく、‘It is broadcast at 9 p.m. on Wednesday.’と文章で答えるよう指導する。また、‘Who took Helen to the dental office?’という質問があれば、学生の多くは‘It was her mother.’と答えていたが、質問文ではbe動詞ではなく、一般動詞が使われているから、‘Her mother did.’と答えるのが文法的に正確であると訂正した。このように、文法的な事項に注意して質問文に答えさせるように指導した。

(2) 「小テスト」

上記のような指導の後、「小テスト」を行う。その内容は、リーディング教材の内容を読み直して、その内容についての質問文とそれに対する正しい答えを作成するというものである。しかし、いきなり「小テスト」に入るのではなく、まずは一組の質問と答えを作成させ、クラス全体で一緒にこの作業を行う。そして、学習者自身が書いたものを、何人かに発表させる。その発表された質問文と答えを添削していくことで、質問文の作り方の技術を教えることができる。その後は、できるだけ多くの質問を作成するように指示し、そこで作成した質問文と答えの文が、その日の「小テスト」の回答になるのである。

上記の段階での作業は、リーディング教材を何度も読み返す必然性があるため、内容を正しく理解し、読解力を向上させることができる。さらにライティングを行うことで、統合的な英語力の向上にもなる。そして、積極的な学習意欲も引き出すことができる。実際、内容や文法についての疑問を、質問してくる学生は何人もいた。また、平常のリーディングの授業からこの作業に移行することで、授業に変化をもたらす。この作業をさせる時、学生同士で相談しながら作業することを勧め、私自身も教室中を回ってアドバイスをしたり、内容を覗き込んでコメントしたりと、できるだけ賑やかに取り組ませるよう心がけた。そうすれば、授業に対する集中力が欠けてきている時でも、ある程度、楽しんで学習できるであろう。だが、これだけで

は、ただ賑やかな雑談だけの時間となる可能性もある。これを防ぐために「小テスト」を行うのである。学習者に「小テスト」を意識させることは、緊張感を持続させ、学習に対するモチベーションを高めるための、有効な手段となり得る。

２．２．トランスコーディング（Transcoding）の利用

次に、トランスコーディングの方法を利用した実践例を挙げる。トランスコーディングとは、リーディング教材の内容を図式化するなど、言語を他のコミュニケーションの様式と結びつける学習形式である。この形式では、情報の言語による伝達から視覚的伝達へと変換することもできるが、逆に視覚的なものを言語化するという、両方行的過程で学習できる[3)]。トランスコーディングの方法によって学習した後、完成した図やパラグラフを、改めて書かせるという「小テスト」を実施すると効果的である。もちろん、場合によっては、新たなトランスコーディングの作業をさせる方が効果的なこともあるだろう。しかし、ノートに書いた図やパラグラフを写す作業だけでも、学習内容を反復し、それを内在化していく助けとなる。

さてここで、言語情報から視覚的情報へという方向でのトランスコーディングと、その逆方向でのトランスコーディングとの、両方の例を挙げる。

２．２．１．年表（Time Line）の作成

リーディングの教材の内容が、ある時間軸に従って論旨が展開していく時、その内容を年表に図式化していくことが、内容理解において効果的である。次に例として挙げた文章は、渋谷の変容について書いた教材の一部の抜粋である。

> “I think (Shinjuku's rise) coincided with the opening of Parco ―a fashion complex for young people ―on Koendori Street in Shibuya. [⋯] although the fashion complex attracted a young crowd, the town [Shibuya] remained a “town of adults.” ⋯. However, things gradually changed after 109, now the area's most popular fashion complex, and 109 Part II were established in 1979 and 1989, respectively⋯. “So many young people go to the two buildings⋯ and adults started to avoid this young crowd as a result,” Mitsumizo said.[4)]

授業では、まず上の文章の精読をした後、**表２**のような年表を作成するという作業を行った。英文中の渋谷の変容について様々な解説から、実際に渋谷という街に起こった「出来事」(Events) と、可能であれば「年代」(Year)を書き出し、次にその「出来事」が原因となって、結果として生じた「変化」(Changes) を書くという手順である。

３）K.ジョンソン/K.モロウ 編著、小笠原八重 訳『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』(桐原書店 1984) pp.102-103.

４）使用テキスト: Takehiko Ohsawa, Shigeyo Yamamoto, ed. *News Flash: English through the Media*. Tokyo: Nan'un-Do, 2005.

表２　渋谷の変容

Year	Events	Changes
1979	Parco opened.	Parco attracted a young crowd, but Shibuya remained a “town of adults.”
1989	109 opened. 109 Part II opened.	Many young people go to 109 and 109 Part II and adults started to avoid this young crowd. As a result, Shibuya became a “youth town.”

この年表の作成のためには、まず英文の内容を正確に理解していることは前提条件として、言語情報を視覚的な情報にトランスコーディングしなければならない。また同時に、内容をパラフレーズすることにもなり、内容理解を深める効果が期待できる。しかし、この作業には、学習者側の能動的なリーディングと教師側の支援とが大切であり、それを確実に行うために、作業自体には授業中に全員で取り掛かり、ノートに書き取らせる必要がある。その後に実施する「小テスト」では、作成した年表を写すという作業をさせる。

この形式の「小テスト」では、確かに、学習者は自力でトランスコーディングを行うわけではないが、授業の最初に「小テスト」の形式を告知しておくと、学習者は授業に着実に取り組んでなければ解けない問題であると認識するため、授業への集中を高めることができる。また、この「小テスト」を受けること自体が、授業内容を復習し、反復練習することとなり、学習効果を高めることができるのである。

２．２．２．平面図から「場所」を説明する英文のライティング

次に、ある「場所」についての説明をする教材を読む時に行った、トランスコーディングの作業と、「小テスト」の例を挙げる。まずは、上記の「時間軸」と同じ要領で、ある「場所」を説明する言語情報を、図面という視覚的情報に転換する作業が考えられる。そしてこれも、内容理解の作業として有効である。だが今回は、この段階にとどまらず、ある図面からひとつのパラグラフを英作文していくという、言語情報から視覚的情報へのトランスコーディングも行い、両方向的に情報コードを転換することを試みた。この授業では、中級のライティング教材を編集しなおした教材を利用した[5)]。したがって、英語自体は、リーディング教材としては比較的、平易なものであったが、その分、英文読解よりも、「場所」の描写の方法という一点に注意を集中させることができる。このように、リーディングにライティングのスキルを結びつけながら、「場所」を描写する英文において物や場所の位置関係を正しく把握できるようになること、そして「場所」を描写する英文のライティングを容易にできるようになることを目指した。

授業では、最終的には図面からパラグラフを書くことを目標として、モデル・パラグラフの精読から、パラグラフの構造の学習など、段階的な手順を踏んで、学習を進めていった。次に詳しく述べる。

５）使用テキスト: Karen Blanchard, Christine Root, ed. *Ready to Write: A First Composition Text.* 3rd Edition. New York: Longman, 2003.

(1)　基本的事項の学習

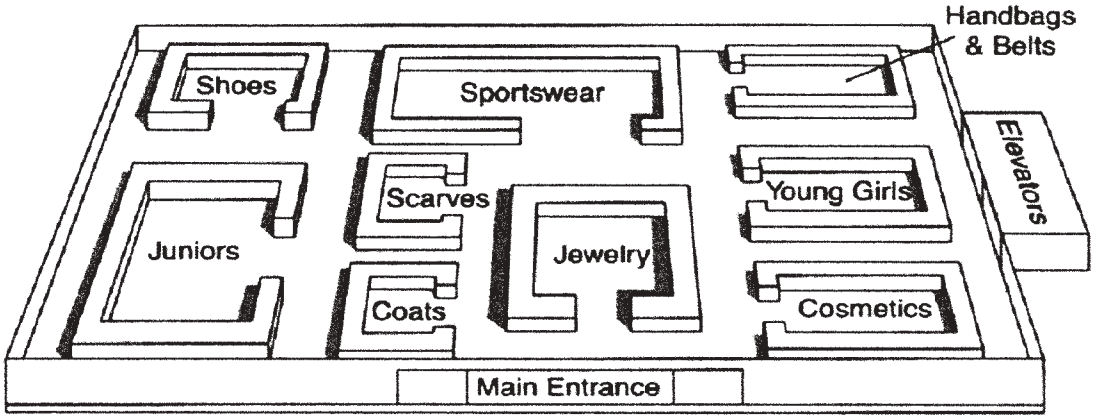
まず、「場所」を描写するパラグラフでは、物の配置や位置関係に関する情報が、ただ無秩序に並べられているのではなく、英文の構成原理に従って論理的に並べられていることを説明する。つまり、まずはトピック・センテンスがあり、あとは、左から右、上から下、時計回りなどの流れに沿って、具体的な描写がある、という簡単な方法論であり、これは図と例文を用いて説明すればわかりやすい。

また、位置関係を正確に示すために必要とされる合図語 (Signal Words)、すなわち「場所」を表す前置詞や副詞などを、穴埋め問題などの練習問題を解きながら復習する。

(2)　モデル・パラグラフの精読

次に、上記で学習した内容を確認するために、下の見取り図を参照しながら、次のモデル・パラグラフを精読していく。

図１　The Floor Plan of the First Floor of the Lourie's Department Store



The first floor of Lourie's sells clothing and accessories for women and girls. As you enter the store through the main entrance, the jewelry department is directly in front of you in the middle of the store. The coat department is on the left and the cosmetics department is on the right. The junior shop is on the left, behind coats. Women's shoes are located in the left corner. Next to the shoe department, behind jewelry, is the sportswear department. Handbags and belts are next to sportswear in the right corner. The young girls' department is on the right, between handbags and cosmetics. The elevators are on the right wall.

この時、モデル・パラグラフのリーディングが終わったら、見取り図の中に、説明されていく順序で番号をつけさせ、さらに番号順に矢印で結びつけるように指示する。これは、ただ読むだけにとどまらず、この「場所」に関する情報が、見取り図という視覚的情報から言語情報

へと転換される時、どのような合図語を用いて、どのような順序で文章を構成していったのかを考えさせるための作業である。

⑶ トランスコーディングによる学習

次にいよいよ、トランスコーディングの作業に取り掛かる。まず、言語情報を視覚的情報へのトランスコーディングを行う。すなわち、次に挙げた、ある百貨店の２階売り場の配置についての文章を読み、その言語情報に従って平面図を完成させる、という作業を行うのである。

1. The elevators are on the wall on the right.
2. The men's casual clothing department is in front of the elevators.
3. The coat and suit department is in the middle of the store.
4. Men's shoes are to the left of the coat and suit department.
5. Swimwear is to the left off the entrance.
6. The shirt and tie department is in the left corner, behind the shoe department.

これによって見取り図を完成させたら、次は、この見取り図を新たなパラグラフへとトランスコードさせる。そのために、まず見取り図中に自分が説明したい順番に番号をつけさせたり、矢印をひかせたりして、学習者自身に文章の構成方法を考えさせる。そして英作文に取り掛からせる。

このように、視覚的情報と比較対照しながら言語情報に転換していくことで、英語のパラグラフの構成を意識して、読み、書くこととなる。これは、「場所」の表現方法にとどまらず、英文のディスコースの構成原理自体を学習することとなるのである。

⑷「小テスト」

最後に、この完成させたパラグラフを「小テスト」の解答用紙に、改めて清書させる。この前に、よくある間違いを指摘して、自分の書いた英文を読み直させ、間違いの添削、訂正をさせると、さらに学習効果が見込める。

この「小テスト」そのものは、ただ書き写すだけの作業のようにも思われるが、この作業を行うためには、授業時間中の真面目な取り組みが必要とされる。そのため、「小テスト」を見れば、授業態度は一目で見抜くことができるのである。

このように、視覚的情報と言語情報とを相互にトランスコードする作業を繰り返すことで、「場所」についての表現方法を正確に学ぶことができる。授業の最初には‘behind’と‘beside’の違いが曖昧であった学生が、授業後の「小テスト」の解答では、正確にそれらの語を用いてパラグラフを書いていた。ライティングをさせている間に、授業中に触れなかった文法的な問題に対する質問をしたり、オリジナリティーのあるパラグラフを書いたり、学習者の積極的な学習態度を引き出すことができたのではないかと考えている。

トランスコーディングの手法を利用して、私が実施した「小テスト」では、学習者の自力の作

業を要求するのではなく、授業中に行った作業を「小テスト」の紙面上に写すことを要求した。そのため、「小テスト」の結果からは、学習者の英語力を診断することは難しく、また、「正解」を写すだけの作業であるため、教材の内容理解の程度を測定することも難しい。しかし、少なくとも、授業に対して真摯に取り組んでいるかを判断するために有効であることは、既に述べたとおりである。そして学習者側も、言語化した情報にせよ、視覚化した情報にせよ、その内容を繰り返し見直すことで、学習者は情報内容についての正しい理解に至る。この過程において、学習者は、情報の発信者の立場と受信者の立場に交互に立つこととなり、そこでリーディングとライティングの作業を反復して行うのである。言語学習において反復的な学習の必要性は、ここで述べる必要もないだろう。

３．おわりに

ここまで、「小テスト」を利用した授業の有効性について、実践報告を中心にまとめてきた。既に述べたとおり、いつも決まった形式での「小テスト」を繰り返すことは、マンネリズムに陥り、教師側の負担が大きくなる割には、教育的効果が見込めない。このような結果にならないよう、可能な限り、授業の流れの一環として、多様な形式の「小テスト」を実施するように努力してきた。それが、授業に変化をもたらし、学習者の授業態度の向上へとつながり、さらに、私にとって、授業の内外においての学生とのコミュニケーションになったことは確かである。このような有効性は認められるものの、反省点は残る。それは、その日に学習した項目に「小テスト」の範囲を限定したことで、やはり授業外での自主学習に対するモチベーションを喚起するものとはならなかったことである。これについては、試行錯誤を繰り返しながら、これからも改善を加えていきたいと考えている。

参考文献

池永勝雅・小笠原八重『英語指導の基本』桐原書店 1990.

片山嘉雄『新・英語科教育の研究』大修館書店 1994.

富岡龍明「パラグラフ・ライティングの必要性―入試対策も含めて」『英語教育』2005年９月号、大修館書店.

K. ジョンソン・K. モロウ 編著、小笠原八重 訳『コミュニカティブ･アプローチと英語教育』桐原書店 1984.

使用テキスト

Takehiko Ohsawa, Shigeyo Yamamoto, ed. *News Flash: English through the Media*. Tokyo: Nan'un-Do, 2005.

Karen Blanchard, Christine Root, ed. *Ready to Write: A First Composition Text*. 3rd Edition. New York: Longman, 2003.